

2024 年度グローバル地域文化学部自己点検評価報告

2025 年 3 月 17 日

2024 年度グローバル地域文化学部自己点検評価委員会

I. 教育活動

2024 年度は、新しい学年暦が施行され、通常の教室での授業は 13 週の授業期間に受講し、残り 2 週分の授業はオンデマンドで受講することが基本となった。対面で行う面接授業とオンラインの授業をいかに有機的に融合させるか、また、生成 AI の発展など新たに検討すべき課題は散見された。以下、科目群ごとに概要を記す。

- ① 必修科目(講義系): 1 年次を対象にコース横断の「グローバル地域文化論Ⅰ・Ⅱ」(旧カリキュラムでは「グローバル地域文化論」および「グローバル・スタディーズ論」)を開講した。また、おなじく 1 年次を対象に 3 コースそれぞれが「ヨーロッパ/アジア・オセアニア/南北アメリカ研究入門Ⅰ・Ⅱ」(旧カリキュラムでは、「グローバル地域文化入門」および「グローバル地域文化の基礎」とし、2 年次対象)を開講した。「グローバル地域文化論Ⅰ」では、複雑で多様な現代世界を理解する試みとしての「グローバル地域文化学」の基礎を、「グローバル地域文化論Ⅱ」では、グローバリゼーションにかかわる重要な問題群を複数のディシプリン(学術的専門分野)からアプローチする方法を、複数教員がリレー講義形式で扱った。また、「ヨーロッパ/アジア・オセアニア/南北アメリカ研究入門Ⅰ・Ⅱ」では、各コースでの学びの基礎となる地域概念や各国事情、歴史的背景や政治・文化・社会状況について扱った。
- ② 必修科目(演習系): 1 年次対象の「グローバル地域文化導入セミナー」と「グローバル地域文化入門セミナー」(旧カリキュラムでは「グローバル地域文化入門セミナー」は 2 年次対象)では、文献読解、文章作成、情報検索の方法や、批判的思考、問いの立て方、口頭発表やディスカッションなど、大学での学びの基礎を鍛えた。3 年次対象の「グローバル地域文化発展セミナー」、4 年次対象の「グローバル地域文化専門セミナー」では、卒業論文の執筆に向け、基本文献の輪読や各自のテーマ設定、先行研究の批判的読解、文献リストの作成をおこなった。また 4 年次の学生には「卒業論文」の履修を課し、担当教員が個別指導をおこなった。その結果、184 名が卒業論文の提出・審査を経て、合格と判定された(うち 1 名は春学期末に提出)。秋学期末の卒業論文発表会は、各コースとも全面対面形式で実施した。
- ③ 選択必修科目(講義系): 「グローバル・イシュー1~11」では、カリキュラムの 4 つの軸の一つである「トピック/イシュー」をグローバルな観点から学ぶ講義を開講した。11 科目のうち5科目は 1 年次から履修可能となっている。
- ④ 選択必修科目(演習系): 2 年次対象の「グローバル地域文化教養セミナー1~13」では、領域横断的・超領域的なアプローチを身に着ける前提として、各ディシプリンに固有の考え方やアプローチ、視角、学問的な手続きを学ぶために、テキストの読解やグループ発表、ディスカッションなどをおこなった。
- ⑤ 選択必修科目(スタディ・アブロード科目): 学部独自の留学プログラムである「海外語学プログラム(英語)」を 2024 年度も実施することができた。ただし、コロナ禍を経て本学部生の海外留学志向は依然として高いものの、渡航費用の高騰や4年間を通した履修計画、早期化する就職活動との関連などから、プログラムの履修者数は減少傾向にあり、「海外インターンシップ(メルボルン)」については休止となった。一方、身近なグローバル・イシューについて英語で発

信できる力を養成する「グローバル地域文化学の発信」（後述する「グローバル地域文化学の実践 1～5」と併せて履修することで、卒業要件を充足できる）は、前年度 36 名に対し、35 名の学生が履修した。また、留学経験を将来のキャリアに活かすことを支援する「留学とキャリア形成」も開講した。

- ⑥ 選択科目（講義系）：コースごとに当該地域の歴史、社会、文化、現代の課題など多岐にわたる内容の科目を開講した。学生は各自の関心に応じ、コース横断的にこれらの科目を履修した。また、国内でグローバルな体験を積むことのできるフィールドワーク・プロジェクト型の科目「グローバル地域文化学の実践 1～5」には、多くの海外プログラムが再開したのちも一定のニーズが継続して見られた（36 名の学生が履修）。さらに、この科目と併せて履修することを推奨する「質的調査の方法」と「計量分析の方法」を開講した。
- ⑦ 選択科目（演習系）：卒業論文執筆にあたって必要な外国語文献および資料の読解や検索の基礎を学ぶ「○○語で学ぶ地域文化研究（英語・初修言語）」と、英語でグローバル・イシューを学び考える「Global and Regional Cultural Studies Seminar」を開講した。
- ⑧ その他：外部試験結果による英語科目の単位認定を実施した。

II. FD 活動

本学部では、カリキュラム検討/FD 委員会を組織し、授業科目のカリキュラムや教育内容・方法について定期的に議論し、改善方法を検討している。今年度は SA 科目の拡大を中心に検討した。円安による渡航費の高騰や学生の関心の多様化から、現行制度以外の SA 科目の枠組み作りを模索したが、全学部規定に抵触する可能性が高いため断念するに至った。一方で『履修要項 2024』29 ページに記載されている「各国政府主催の留学や海外研修（またはそれらに準ずる留学や研修等）に参加し、かつ参加後に「留学とキャリア形成」を履修した場合、学部の判断により選択必修科目 B 群（スタディーアブロード科目群）の卒業要件を満たすものとして認定されることがあります」という規定が実質的にはほぼ使われていないことが判明した。そこで今後はこれを活用することを提案することとした。その際、①政府もしくはそれに準ずる機関による制度であること、②選考が行われることの 2 点を条件とする。具体的には「トビタテ・ジャパン」や各国政府の交換留学、フルブライト、ロータリー奨学金等が想定される。

カリキュラムを検討する際の資料とするため、12 月から 1 月にかけて 1 年次生と 3 年次生を対象に毎年学部独自のアンケート調査を行った。これまで回収率の低さが課題となっていたことから、今年度からアンケート内容を大幅に変更し、回答しやすい形式に整えた。学部の授業の満足度に関して選択回答式による 5 項目の質問と、自由記述 3 項目からなるアンケートを行った。回収率は昨年度が 1 年生 61.7%、3 年生 45.3%であったのに対し、今年度は 1 年生 71.1%、3 年生 52.9%と大幅に上がった。授業については、概ね満足しているという回答が多かった。自由記述や不満があった項目を中心に、引き続き検討を行う予定である。

また 7 月に FD 研修会を開催した。本学部では、2022 年度の研修会から学部のコンセプトを共有することを目的として、学部における指導や方向性について意見交換を行ってきた。2024 年度は卒論指導および評価のあり方について、教員同士で話し合った。そこで出された意見を集約し「卒業論文審査方法の申し合わせ」の修正に向けた検討を委員会で行っているところである。

III. 研究活動

本学部の研究活動を担う組織として、グローバル地域文化学会がある。グローバル地域文化学会では、年に2回学術雑誌『GR』を発行している。今年度も10月に第23号を発行し、3月末に第24号を発行する予定である。

本学会では、年に複数回の講演会を開催している。2024年度には、2回の小規模講演会と1回の学術講演会を行った。小規模講演会については、第1回講演会が「ポピュリズムの視点から見たアメリカ政治」と題して5月25日に開催された。アメリカ史におけるポピュリズムの伝統に焦点を当て、アメリカ政治史研究の重鎮で米国メディアでも著名な Michael Kazin 教授（ジョージタウン大学）を招聘し講演していただいた後、東京外国語大学名誉教授の金井光太郎先生が独立革命期から19世紀前半のアメリカ政治の変化についてポピュリズムの視点から講演を行った。第2回目は「『ユーラシア東部』とは何か？—初期グローバル化の世界史の観点から—」と題し、2025年2月1日に開催された。講演者の荒川正晴先生（東洋文庫）は、遊牧・農耕地帯を視野におさめ、さらに海域世界をも含む「ユーラシア東部」という地域概念を提示し、そのもとでパミール周辺地域を境界地域として含んだ「ユーラシア東部」の大きな歴史像を提示した。これについて山内晋次先生（神戸女子大学）、伊藤一馬先生（日本大学）、矢部正明先生（関西大学附属中等部・高等部）がそれぞれの専門からのコメントを行った。学術講演会は、10月30日にトランスジェンダーの当事者である三橋順子先生とかなたいむ氏をお招きして、グローバル地域文化学部学術講演会「トランスジェンダーとして生きること」を開催した。研究者である三橋先生、YouTube や SNS 発信で活躍されているかなたいむ氏という異なるフィールドの2人が、それぞれ独自の視点でトランスジェンダーの当事者性について分析した。後半はゲストと学生5名を交えたトークセッションを行い、さらにフロアとの質疑応答も活発に行われて有意義な講演会となった。

各教員は著書、論文執筆に加え、学会発表などを通じた研究活動を活発に行った。詳細は、本研究者データベースを参照されたい。

（URL: <https://kendb.doshisha.ac.jp>）

IV. 国際交流活動

本学部独自の学生渡航プログラムとして、セメスタープログラム（ウェスタンミシガン大学）が実施された。海外インターンシッププログラム（メルボルン）は、今年度は休講となった。延世大学校人文芸術大学国語国文学科と本学部との学生交換協定では、本学部から1名の学生を派遣した。

2025-26年度は全学の外国協定大学派遣留学制度にも本学部から多くの学生が応募、合格した。本学部からの合格者は、春学期中に応募期間のあったA日程（渡航先はオーストラリアと韓国）では9名[昨年度は5名]、秋学期中に応募期間のあったB日程（渡航先は北アメリカ、ヨーロッパ、アジア諸国）では42名[昨年度は52名]であった。ヨーロッパ・スタディーズ EU キャンパスプログラムについては5名[昨年度は4名]が合格した。

学術交流協定校であるアーモスト大学への短期交換教員派遣短期について、Andres Perez Riobo 准教授を派遣した。

海外からの研究員については、まず2023年9月1日～2024年8月23日に釜山教育大学校より金竣亨（キム ジュニョン）教授を受け入れた（受入担当教員：コ ヨンジン教授）。つ

ぎに 2024 年 9 月 1 日～2025 年 8 月 31 日にアーモスト大学アーモスト・同志社フェローとして Grace Walker (グレース ウォーカー) 氏を受け入れている (指導教員: 水谷智教授)。

V. 社会貢献活動

本学部教員の活動として、以下のものが挙げられる。

James HEATHER 准教授

- ・カリキュラムと適切な評価との整合性に向けて、英語のプレゼンテーションのためのテンプレートや評価のためのルーブリックの導入に関する研究を実施し、この研究成果は、2025 年 2 月にカトマンズで開催されたネパールの英語教員協会の教員研修に使用された。

石井香江教授

- ・シンポジウム「ルール炭田の日本人: 越境者たち」(Japaner im Revier: Aufbruch ins Fremde) において、レギーナ・マティアス教授の講演 „Gastarbeiter Oder Technologietransfer? Zum Hintergrund der japanischen Bergleute im Ruhrgebiet "に対するコメントと質問 (2024 年 9 月 7 日、於: ケルン日独文化センター)。

亀谷百合佳助教

- ・フランス初のイスラム女性聖職者(イマーム)についての研究 (「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合研究」) のフィールドワークに参加。(2024 年 2 月 23 日、於: パリ・モスク、アラブ世界研究所主催)。

見原礼子准教授

- ・ワークショップ「子ども虐待の現状を踏まえ、解決に向けて何が必要となるのかを大学生と参加者が共に検討する」企画、運営参加・支援 (京都市西京区「はぐくみ」ネットワーク実行委員会主催、2024 年 7 月 29 日、於: 京都市立桂小学校)。
- ・座談会ゲストへの招へい (上記ワークショップを受けてのさらなるディスカッション、京都市西京区「はぐくみ」ネットワーク実行委員会主催、2025 年 1 月 30 日、於: 京都市立桂小学校)。
- ・基調講演「現代世界において求められるユネスコスクールの役割—若者エンパワメントの実験場としての課題と可能性」、『第 5 回ユネスコスクール関東ブロック大会 ユネスコスクールと全人教育—若者エンパワメントに向けた教師の役割』(2024 年 10 月 5 日、於: 玉川大学)。
- ・ワークショップ「日本社会におけるイスラーム学校の教育理念と未来への展望」実行委員長・総合司会 (笹川平和財団「日本社会におけるイスラームの実像」事業(2022-2024 年度)主催ワークショップ、2024 年 12 月 21 日、於: 名古屋大学)。

PEREZ RIOBO Andrés 准教授

- ・他大学の教員と協力し、スペイン語短期留学の事前授業用の教材を開発し、Web サイトを創設した。
- ・講演「宣教師が見た日本の自然環境と人間」(2024 年 5 月、於: 大阪府高齢者大学校)。

清水穰教授

- ・以下の執筆等を行った。
 - 「音楽の外を目指して」(ライナーノート、CD『Soul Boat』Utsunomiya MIX-007、various artists、Nomart Editions)
 - 「リヒター・ラウムのビルケナウ」(展覧会パンフレット、Richter Raum Karuizawa/Wako Works of Art Gallery)

「水滴の主題による変奏曲 武田陽介展に寄せて」(展覧会パンフレット、Kos Kanechika Gallery)

「世俗的啓示スターリング・ルビーの「亡霊 SPECTER」シリーズ」(Starling Ruby 『SPECTERS』所収、Taka Ishii Gallery)

「Art Subtilior. Tokyo Node の蜷川実花」(蜷川実花『Tokyo Node: Eternity in a Moment』展図録、美術出版社)

「花と器と写真のフュージョン、杉田一弥の花」(杉田一弥『FLOWERS』所収、青幻舎)

「焼 KE 跡 WO 忘 RENAI 曾田浩隆の言語アート」(曾田浩隆『日本語の書字』展パンフレット、喜多美術館)

「これは陶芸ではない」(月刊『Art Collectors』11月号「焼き物の複数形」、生活の友社)

「陶芸の裂開」(季刊『BT 美術手帖』11月号「現代美術と陶芸」、美術出版社)

「それはかつてあった—渡辺大語の書」(パンフレット、島根県立近代美術館『渡辺大語展』)

阿部範之教授

・(総説)2024.5.8「中国映画」について、「アジア・マップ」(『アジア・日本研究 Web マガジン』)Vol. 2 の執筆。

Aysun UYAR 准教授

・「Branding Strategy of Chobani Yoghurt in USA」(ゲスト・スピーカー、2024年5月31日、立命館大学食マネジメント学部「Dairy Business」講義)。

・ゲスト・スピーカー「和食とグローバル化」(ゲスト・スピーカー、2024年6月21日、立命館大学食マネジメント学部「世界の食と経済」講義)。

・「アジア:トルコの食文化」(非常勤講師、2024年10月28日、京都府立大学文学部和食文化学科「比較食文化学」講義)。

殷晴助教

・「中国料理の受容:日本における餃子と肉まんの歴史」(講師、2024年7月25日、於:大阪府高齢者大学校)。

・「日本式中華料理の創成:天津飯と中華丼の例」(講師、2024年8月1日、於:大阪府高齢者大学校)。

・同志社大学・京都大学・東京大学研究生交流会「近代東アジアにおける人物と移動」(コメンテーター、2024年10月26日、於:同志社大学烏丸キャンパス)。

張素娟准教授

・「現代中国語文法講座」(講師、2024年7月、NPO 法人日本中国語講師協会)。

二村太郎准教授

・西陣・桃薫・聚楽・成逸の4学区から成る西陣まちおこし会が隔月で実施している西陣朝市マルシェ(於:西陣児童公園)におけるボランティア、設置、撤収手伝い。

・継志館教育寮運営委員会における活動。

和泉真澄教授

・同志社 EVE アカデミック企画地域と大学をつなぐ学術シンポジウム「日系移民史から考える戦争と人権—世代と国を超えたパブリック・ヒストリー構築への試み」企画・司会・講演「太平洋戦争下の日系カナダ人」(2024年11月27日)。

・博物館展示「Broken Promises 破られた約束—太平洋戦争下の日系カナダ人」日本巡回展(2024年11月22日—12月27日、於:同志社大学ハリス理化学館)。

・シンポジウム From Mio": Community-based Public History Symposium「フロムミオ」:
三尾科研パブリック・ヒストリー国際シンポジウム企画、司会(2024年5月11日、於:和歌
山県日高郡美浜町三尾旧三尾小学校)。

・「地域史に見出すグローバルな気付き—移民母村における資料の掘り起こしと次世代育成
への試み」企画、司会(日本移民学会年次大会開催校企画、2024年6月23日、於:同志
社大学)。

・Curtis Chin, Everything I learned, I learned in a Chinese Restaurant,ブックトーク
ブックト(ゲスト・コメンテーター、2025年1月25日、於:Asian American Literature
Association)。

落合明子教授

・クローバーシアター映画上映会特別編 上映作品:『権力を恐れず真実を—米国下院議員
バーバラ・リーの闘い—』(アピー・ギンズバーグ監督、2020年)の司会等(2024年11月11
日、於:同志社大学寒梅館クローバーホール 小ホール)。

坂本南美准教授

・以下の研修会において、講師をつとめた。

「スパイラルアップを図る授業づくり—JTEとALTのコラボレーションから—」(令和6年第
1回奈義町教育研修会、2024年4月5日)。

「『目的・場面・状況』を活かした小学校授業での言語活動」(令和6年第2回奈義町教育
研修会、2024年6月7日)

「小中連携を視野に入れた、ALTとJTEの効果的な協働の在り方」(令和6年第1回但
東中学校区小中合同研修、2024年8月23日)

「チーム・ティーチング英語授業における教師たちの役割と協同」(令和6年第3回奈義町
教育研修会、2024年10月11日)

「効果的なチーム・ティーチング授業づくり—教室空間における教師の役割と協同—」(令和
6年第4回奈義町教育研修会、2024年11月8日)

「教室での教師のつながりと役割—小中英語授業でスパイラルアップを図る—」(令和6年
第2回但東中学校区小中合同研修、2024年11月29日)

David TARANCO 准教授

・JAPAN FOUNDATION(国際交流基金)が主催する現代演劇、ダンス、伝統芸能、音楽
などの多様な日本の舞台公演を多言語付きで配信するプロジェクト(Stage Beyond
Borders)のスペイン語の翻訳(字幕)。

清水達也教授

・ラテンアメリカ研究センターの研究会「農村における労働とストライキ:ペルーの農業輸出を
めぐる社会紛争」(講師:ペルー・パシフィコ大学 Omar Manky 准教授)の企画、実施(2025
年1月21日)。

VI. 学生支援活動

- ① 学習支援:外部の外国語(英語・初修外国語)検定試験の受験に際し、受験料の半額補助を
行うなど、語学力向上のための機会をさまざまな形で提供した。
- ② キャリア形成支援:昨年度に引き続き、就職委員ならびに学生有志団体「グローバル★キャリア
企画」との連携により学生の目線から GR での学び、留学、キャリアを継続的にとらえることを

目的にした「グローバルキャリア・トーク」を6回企画した。本企画の特徴とは、グローバル地域文化学部 の 在 学 生 が 就 職 へ の 手 が か り を 得 る の み な ら ず、卒 業 生 と の つ な が り を 意 識 し、交 流 の 機 会 を 生 み 出 す こ と に あ る。ま た、学 生 委 員 に よ る 企 画 の 準 備、講 演 者 と の 連 絡、当 日 の 司 会 と 進 行 を と お し て、学 生 の 主 体 性 と 協 調 性、そ し て 発 信 力 の 向 上 に 役 立 つ 学 び を 提 供 で き る こ と に も あ る。

第 1 回 グローバルキャリア・トーク「就活を終えた GR 生の先輩から話を聴こう！」

日時:2024 年 5 月 29 日(水)14:55~16:25

会場:同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK101 教室

講師:2021 年度入学生(ヨーロッパコース)、2021 年度入学生(ヨーロッパコース)、2021 年度入学生(アメリカコース)、2021 年度入学生(アメリカコース)

参加合計:93 名

第 2 回 「グローバルキャリア・トーク「企業の採用担当者の本音を聞く」

日時:2024 年 6 月 26 日(水)13:30~15:30

会場:オンライン

講師:(株)近鉄エクスプレス、CJ FOODS JAPAN(株)

アクセス数:33 名

第 3 回 グローバルキャリア・トーク「学ぼう!グローバルなキャリアプランの描き方」

日時:2024 年 7 月 18 日(水)14:55~16:25

会場:同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK110 教室

講師:立石 英吾(たていし えいご)さん(世界銀行ワシントン D.C.本店・地理空間分析支援チーム)

参加合計:35 名

第 4 回 「グローバルキャリア・トーク「派遣留学とキャリアプラン」

日時:2024 年 10 月 2 日(水)14:55~16:25

会場:同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK110 教室

講師:2019 年度入学生(ヨーロッパコース)、2021 年度入学生(アジア・太平洋コース)、2021 年度入学生(アメリカコース)

参加合計:30 名

第 5 回 「グローバルキャリア・トーク「日本国内で『グローバル』を考えるー『世界青年の船』の体験をとおしてー」

日時:2024 年 10 月 31 日(木)16:40~18:10

会場:同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK110 教室

講師:岡本 京子(おかもと きょうこ)さん(2020 年度入学生、ヨーロッパコース、神戸大学大学院国際協力研究科修士課程)、前田 ジャスパー(まえだ じゃすぱー)さん(同志社大学法学部 3 年次生)

参加合計:32 名

第 6 回 グローバルキャリア・トーク「就職相談会ー2025 年 3 月卒と語ろう!ー」

日時:2025 年 1 月 8 日(水) 14:00~17:00

会場:同志社大学烏丸キャンパス志高館 SK112 教室

講師:2025 年 3 月卒業予定者(合計 10 名)

参加合計:27 名

- ③ その他の事業:4 月 2 日の新入生歓迎会の実施によって、上級生と下級生の関係構築を図りつつ、12 月 1 日の GR 学部同窓会(GRA-同志社 GR 同窓会-)の結成によって、卒業生同士の関係構築も図った。また、3 月 21 日の卒業生謝恩会の開催によって、新たに卒業生となる在学生たちは GR 学部への思い入れを強めることだろう。GR 学部に関係したすべての学生たちの関係を深めることが、在学生たちのキャリア形成の一助となるのは確かである。
- ④ 今後の課題
- ・グローバル地域文化学部生の就職活動への取り組みは遅れがちであることが指摘されるとともに、上記のようなイベントに対する参加率も必ずしも高いとは言えない。就職活動早期化という現実を前にして、学生の意識を喚起し、高めていくための方策が必要である。
 - ・就活生たちの OB/OG 訪問をスムーズに実現するとともに、彼ら/彼女らの就活を成功させるためには、同窓会を軸として卒業生と GR 学部の関係をより一層深めていくことが必要である。
 - ・全専任教員が 3 年次および 4 年次のセミナーを担当できるわけではなく、交代で担当せざるをえないなかでは、“研究室の縦のつながり”が途絶えてしまうため、在学生は就活に臨むまでのプロセスを意識することも、自分自身で卒業生との関係を構築することもできないままになってしまう。こうした状態を改善するためには学生主任だけでなく、すべての教員が在学生の意識喚起や、卒業生と GR 学部の関係の構築に対して主体的にならなければならないだろう。

以 上